

大和山々讃称 万葉懷古草子① - 舒明朝から藤原京完成まで -

大和には 群山あれど

とりよろふ 天の香具山

登り立ち 国見をすれば

国原は 煙立ち立つ

海原は かまめ立ち立つ

うまし国ぞ あきづ島 大和の国は

(大和には多くの山が連なっているが、都のほとりのとりわけ美しい、高天の原にあったという神聖な香具山。その香具山に登って国土を見渡せば、この平野にはあちらこちらから炊煙が立ち昇り、湖の水辺には水鳥が飛び遊んでいる。まことに大和の国は、豊かな良い国である)

万葉集第一巻の第二首、「高市岡本宮に天の下知らしめしし天皇」舒明天皇の歌である。年譜で見れば、六〇三年頃のことであろう。この約十年前には聖徳太子が没し、次代の皇極天皇の時代には大化改新が行われる。奇才聖徳太子の出現で、随との交流が本格的に始まり仏教が導入されるなど、変化の多かった時代と、律令制中央集権国家が形成される大化改新との、狭間にあたる舒明朝は、安定した平和な時期であったと思われる。歴史の書物などを見ても、単に天皇の名と遣唐使派遣(随は六一七年に滅ぶ)という事だけで、素通りされていることが多い。確かにこの舒明天皇の歌にも、都を取り巻く美しい自然を慈しみ、外来文化もゆつたりと受け入れ堪能し、豊かなながらも長閑でのんびりした雰囲気がある。

歌の中に「かまめ立ち立つ」とあるが、調べてみると、「かまめ」は「かもめ」のうちでも「ゆりかもめ」という種類で、別名を「都鳥」というらしい。頭が白く、首は褐色、体が銀灰色で嘴と脚は赤、と聞いただけでもその優雅な名前が相応しい感じがする。山に囲まれた盆地に、この海鳥が大和川を遡って来たのだらうということだが、きつと目新しい渡来文化同様に珍重されたのであろう。

ところで、私はまさしくこの歌に詠まれている古代飛鳥の国原で、生まれ育った。今でも故郷の土地を想う時、何よりも真つ先に大和の山々を思い浮かべる。あの穏やかで柔らかな線を描く山の群れは、都を外敵から守り、人々の生活を快適なものにし、そして豊潤な文化を育んだのだと思う。

歌で「大和には 群山あれど」と謡われているのは、都から眺めた遠くの山々である。東には小高い三輪山があり、初瀬山、奈良山が連なり、西には二上山を手前に見て、葛城山など金剛山脈が続き、南の吉野山と交わる。それぞれの山の裾は、青の、緑の濃淡を重ねながらなだらかに大和平野に広がり、その西南部の三つの小山、つまり香具山、畝傍山、耳成山が緑を濃く盛り上げている。これが、大和三山である。

香具山をはじめ、大和三山を取り上げた歌は数多くあるが、中でもひとときわ迫力に富み、有名であるのは、舒明天皇の第二皇子である中大兄皇子の歌であろう。

香具山は 畝傍雄々しと

耳梨と 相あらそいき

神代より 斯くにあるらし

古昔も 然にあれこそ

うつせみも 棲を あらそふらしき

(香具山は畝傍山を男らしく立派だと思ひ、その愛を得るために耳成山と争った

という。神代の時代でもそうだった。昔からそうなのだから、今でも妻を争うことがあるのであろう。

実際の和和三山のうちでも、畝傍山が最も背が高く堂々として風格があり、神代の伝説と一致している。しかし、中大兄皇子（後の天智天皇）がこの歌に言い含めているのは、弟大海人皇子（後の天武天皇）との三角関係である。神代の伝説とは男女が入れ違い、ここで争われているのは、額田王というのが定説である。

大化改新の立役者である中大兄皇子は、六六七年、近江大津京に遷都をし、翌年、即位して天智天皇となる。この時既に、大海人皇子との間に土市皇女をもうけていた額田王は、姉の鏡王と共に天智天皇に召されて大津京に移ることになった。

因に、その後土市皇女は壬申の乱で悲劇の死を遂げる大友皇子の后となり、鏡王は天智天皇の腹心藤原鎌足の妻になる。額田王をめぐる天智、天武の兄弟争いが、壬申の乱の原因になったという俗説は誇張した想像だとしても、額田王が斉明朝から持統朝までの波乱に満ちた時代を前線で生き、永遠に人々に読み継がれる歌を残したのは確かである。

次の歌は、額田王が近江に下る時、三輪山との別れを惜しんで詠んだものである。三輪山も古くから伝説に多く語られ、水の神、酒造りの神として信仰されている、うつそうと美しい緑が繁っている山自体を御神体としている。

味酒 三輪の山

あおによし 奈良の山の

山の際に い隠るまで

道の隈 い積るまで

つばらにも 見つつ行かむを

しばしばも 見さけむ山を

心無く 雲の 隠さふべしや

（素晴らしい三輪山。奈良山の陰にすっかり隠れてしまっただけは、道が幾度も曲がるけれど、ずっとしつかり見たい山よ。何度でも振り返って眺めたい山よ。それなのに、心ない雲がおおい隠したりしてもよいものか）

「味酒」「あおによし」という枕詞でゆったりと言い出して、「い隠るまで」「い積るまで」と「い」の音を重ねること切なさが出てくる。そして、「つばらにも」「見つつ行かむを」「しばしばも」と畳み込むように緊張感を高め、「見さけむ」を頂点として調子を緩めて、最後に「隠さふべしや」と反語を使って言い切る。激しい感情は洗練された知性の柱でしつかりと支えられ、さらにその上に天然の朗らかさが色彩を添えているといった感じで、私はこの歌に陽性なものすら感じるのである。

額田王は、日本女流文学史上、最初に現れた綺羅星であり、今も尚堂々と輝き続ける大スターである。またの機会に詳しく取り上げたい。

天智天皇崩御の後、吉野に籠って機会をうかがっていた大海人皇子は、六七二年、古代史上最大の戦いである壬申の乱をおこし苦戦の末、遂に近江朝廷を倒す。六七三年、飛鳥の浄御原宮で即位、天武天皇となる。天武天皇はその在位中、天皇の権力の確立に意欲を燃やす一方で、大和の地に都を再建する夢を抱いていた。皮肉なもので、国の不安定な状況とは裏腹に、この時期唐様文化が大量に流れ込んできた。天皇制を確固たるものにしたあかつきには、優雅な自然に囲まれた飛鳥の地に、唐の条坊制にならった雄大な都を築くのである。しかし、

六八六年、天武天皇はその夢を手掛けることなく崩じてしまう。

しかし、ここでまた悲劇が繰り返される。天武天皇の後の鷗野讃良は、皇子の草壁皇子を皇継させようとするが、甥にあたり、やはり天武天皇の皇子である秀才の誉れ高い大津皇子が目障りであった。大津皇子はすぐさま謀反のかどで処刑されてしまい、二上山に葬られる。その頃、齋宮として伊勢に仕えていた大津皇子の姉の大伯皇女は、この事件で解任されて飛鳥に帰ることになる。二人の母后は、天智天皇の皇女の大田皇女で、父親は無論天武天皇であるのだから、この辺の複雑さ、残忍さは我々の想像を絶するものがある。大伯皇女は、弟を偲ぶ歌を六首、万葉集に残しているが、そのうちの次の歌は、読めば誰もが知っているだろう。

磯の上に 生ふるあしびを 手折らめど 見すべき君が ありといわなくに
 (岩のそばに伸びているあしびを手折ろうと思うけれど、その花を見せてやる弟は、この世にはいないというのに)

中学の国語の教科書に、「あしび」とは「馬酔木」と書くのだと、鈴蘭のような形をした小さな花々の房が垂れている写真が添えられて載っていたのを覚えている。この歌は、大津皇子が二上山に葬られた時に詠まれた二首のうちの一首で、もう一首は更に胸が締め付けられる思いがする。大伯皇女は、やりきれない悲痛の念を弟の屍と共に、二上山に封じ込めたのである。

うつそみの 人にあるわれや 明日よりは 二上山を いろせとわが見む
 (まだこの世の身である私は、明日から二上山を、愛しい弟と違って眺めるのだろうか)

「二上山」は今では「にじょうざん」と言うが、古くは「ふたがみやま」と言っていた。大小ふたつの峰があり、飛鳥の都から見れば、左が雌岳、右が雄岳と呼ばれ、いつも鮮明に見ることが出来、南西に連なる山々との遠近感が美しい。

大学生の頃、毎日車で大阪に通っていた。土地の者しか知らない畑の中の道を行くと、二上山が見事に全景、何にも遮られずに見える一隅がある。私はよくそこで車を止めて、その姿に見入った。季節ごとにはすっきり衣更えをし、朝日や夕日の太陽の角度によってありとあらゆる色に変わり、雨上がりには緑が際立ち、一本一本の木が手に取るように間近に見え、曇った日には薄衣をかぶって、影絵のように輪郭だけが遠くに浮かび上がり、白い雲をまといつかせている時もあり、また時には無味乾燥でありきたりな緑に見えることもあり、一体、私は何種類の姿を見たかわからない。もう大人になっていたが、こうして日々二上山を眺めることで、山が生きていること、私達が山々と共に生きていることを実感し、その感覚を意識上に浮上させたのである。

六九〇年結局、皇継者は鷗野讃良と決まり、即位の式が執り行われる。持統天皇の誕生である。

件の大和三山を従えた条坊制の都の建設がさっそく始められ、六九四年には完成し、藤原京と呼ばれることになる。舒明天皇以降の六十余年の動乱の波を呑み込んで、都はひとまわり大きくなり、ここでひとまず七一〇年に平城京に都が遷るまで、大和の国は平静な風の時代を迎えるのであった。

春過ぎて 夏来るらし 白たえの 衣ほしたり 天の香具山
 (春も過ぎてもう夏になるようだ。天の香具山の辺りに真っ白な衣が乾かしてあるのが見える)

百人一首の第一首になっている新古今集の「春過ぎて夏きにけらし白たえの衣ほすてふ天のかぐやま」の原型である。いとも単純でありながら、緑と白のさわやかな鮮やかさが伝わってくる。夫の天武天皇が切望していた、天皇の権力と、唐風の新都の両方を手に入れた女帝の安堵と満足感を感じられるようである。

持統天皇自身優れた歌人であったこともあり、その後藤原京の宮廷は、柿本人麻呂や高市黒人といった宮廷歌人を輩出していくことになる。大和の和やかな自然の大地に文化の新種の種が蒔かれ、それを健やかに育む安泰な環境が整ったのである。

文化は新しい要素を巻き込みながら、常に形を変えて発展してゆく。途中で枯れてしまった芽や季節が終わって落ちた葉は、次の季節のための肥やしとなる。宮廷歌人と呼ばれる歌人達の歌からは、古代人が山々に神を見、恋しい人を見ていたような自然との一体感は次第に失われていくが、その代わり、唐の文化と混ざり合い、後の平安時代に絢爛に花開く大輪、王朝文学の礎を築くことになる。

そして、舒明朝から一千三百年以上も時が流れたにもかかわらず、藤原京に「とりよろふ」ように生まれ、大和三山や三輪山や二上山を眺めて育った私のような人間が、大和の国を大らかに誇らし気に謳う冒頭の歌に賛同する、というのも不思議なものでもあり、また事実でもある。